談話標識を巡って

廣瀬　浩三

O．はじめに

本稿では，談話標識 (discourse markers) と称される一連の言語表現を取り上げ，これらが言語研究の中でこれまでどの様に取り扱われてきたのかを振り返り，それぞれの分析アプローチにおける基本的な考え方を整理すると共に，改めて談話標識の特徴を抽出し，どのような観点から記述分析していくべきかを論じていきたい。[1]

具体的には，まず，現代言語学の流れを簡単に回顧しながら，それぞれの時期で談話標識がどの様に話題となったのかを見ていく。次に，これまでの主要な談話標識の分析アプローチを紹介し，それぞれのアプローチにおける談話標識の基本的な位置づけをまとめ，その評価を示したい。さらに，談話標識を理論言語学の表舞台に登場させるきっかけとなった関連性理論に焦点を当て，その中心的役割を果たした D. Blakemore の研究を追いながら，関連性理論における談話標識の考え方を議論していく。最後に，現在，談話標識研究の中心的存在である B. Fraser の枠組みをまとめておきたい。

以上の先行研究を踏まえ，談話標識の特徴を改めて抽出し，その分析にあたっての様々な観点を指摘し，今後の談話標識研究の方向性を示したい。

Ｉ．現代言語学の発展と談話標識

本節では，まず，談話標識を巡る様々なアプローチを回顧する前に，現代言語学の発展の中で，談話標識がどの様に注目され，分析されていったのかを駆け足で追っていくことにする。

周知の通り，現代言語学の父祖と言われる E. Sapir や L. Bloomfield による先駆的な研究を経て，1950 年代に構造言語学が登場し，現代言語学が科学の一分野として位置づけられ言語研究が進められていった。そして，1950 年代の後半に，N. Chomsky が登場し，言語科学の状況が一変する。N. Chomsky を中心とする生成文法では，理想的な話し手・聞き手の言語能力 (linguistic competence) の解明を目指し，文がその主たる分析対象となり，言語の生成にかかわる規則，原理の体系化が図られていった。

一方，このような流れと平行して，アメリカ合衆国において，1960 年代後半から，D. Hymes を中心に，「ことばの民族誌」(ethnography of speaking) という幅広い観点から言語を分析していく方向性が打ち出され，生成文法が，言語運用 (linguistic performance) の解明を目指したのに対して，言語伝達能力 (communicative competence) の解明を究極的な研究目標とした考え方が提唱された。この考え方に沿って，さらに社会言語学的見地を取り込んだ H. Sacks，E. A. Schegloff，G. Jefferson などの一連の研究を経て，会話分析 (Conversational Analysis) が発展していった。この会話分析では，発話の順番 (turn-taking) や会話の構成が問題となり，発話の順番のやり取りを合図したり，会話構成の一端を担う

談話標識の働きが注目されることになる。そして，そのような会話分析的アプローチの研究成果として Schiffrin(1987) が出て，談話標識自体に関心が高まることになる。

一方，イギリスおいては，哲学の L. Wittgenstein の考え方に端を発し，日常言語学派による言語研究が進められ，1960 年代から，J.L. Austin や J. Searle による発話行為理論 (speech acts theory) やそして特に 1970 年代からの，P. Grice の研究を経て，語用論 (pragmatics) が確立した。この語用論の研究においては，広く話し手・聞き手の知識体系を踏まえた意味解釈が論じられたが，その枠組みで提唱された慣習的含意 (conventional implicature) や会話的含意 (conversational implicature) との関係，そして，それらを司る様々な公理 (Maxims) との関わりで，談話標識の働きが注目されることなる。[Grice(1975/1989), Levinson(1985)]

また，イギリスにおいて，M.A.K. Halliday は，独自の言語観に立ち，機能主義文法 (Functional Grammar) を纏め上げ，節や文を超えたレベルを射程に入れたテクスト分析に目が向けられるようになった。そうした研究の一環として位置づけられる Halliday & Hassan(1976) は，結束性 (cohesion) を中心概念に据えて，テクスト分析の手法を示し，その中で，接続関係を担う言語表現として談話標識が初めて体系的に研究されたのである。また，T. Van Diik(1977, 1979) も初期の体系的な談話研究として注目される。その後，発話行為理論とこうしたテクスト分析の手法を融合させた形で，談話分析 (Discourse Analysis) が言語学の一分野として定着し，R. M. Coulthard，W. Edmondson などによって，その研究が発展していった。このアプローチの大きな特色の一つとして，すでに取り上げた会話分析と同様に，実際のフィールド・ワークによって得られた会話資料を分析資料としたことが挙げられ，各発話の談話機能を抽出し，談話（会話）のパターンを明らかにしようとしたのである。そして，コンピュター機器の発達に伴い，膨大な資料を蓄積することが可能となり，その資料の分析手法を理論的に纏め上げたコーパス言語学 (Corpus Linguistics) が発展していき，ヨーロッパにおいても談話分析が浸透していくことになる。こうした談話分析において，談話標識がその分析対象となり，その記述的研究が進んでいく。

1980 年代に入って，N. Chomsky が生成文法をさらに精緻なものにして，理論構築を進めていく中，理論言語学は様々な方向へ分化していき，語用論も Grice の考え方を中心とした立場から，様々な方向へ分岐していった。こうした，言語理論が入り乱れる状況の中で，1980 年代半ばから，人間の認知能力を基盤にした新たな言語理論が登場し，再び収束の方向に向かう。その新しい言語研究の潮流の一つは，イギリスにおける D. Sperber と D. Wilson による関連性理論 (Relevance Theory) の構築であった。一方，アメリカ合衆国では，同じ認知能力に立脚した言語理論でも，まったく異なる文法観に立脚した R. Langacker を旗頭とする認知文法 (Cognitive Grammar) が現れ，さらに，G. Lakoff を中心とする認知意味論 (Cognitive Semantics), A. Goldberg などによる構文文法 (Construction Grammar) などが次々と提唱され，さらに生成文法の流れを汲む認知的な言語研究として，R. Jakendoff の概念意味論 (Conceptual Semantics) も一つの言語研究アプローチとして確立し，現在に至っている。

こうした新しい言語研究の中で，談話標識は，特に，関連性理論において，言語学的意

味 (linguistic meaning) を規定していく中で大きく取り上げられ，理論言語学の中心課題のひとつとして談話標識の分析に関心が集まったのである。

その後，談話標識の研究が次第に集約されていき，1990 年代には，談話標識そのものに焦点を当てた研究書や研究論文が次々と出て，談話標識が言語研究の課題の一つとして定着したことが窺える。[Brighton(1997), Jucker & Ziv (eds.)(1998), Carston & Uchida(1998), Rouchota & Jucker(1998), Lenk (1998), Schourup (1991, 2000, 2001)]

そして，今日，もっぱら談話標識に絞って研究を進める学者も現れ，その代表として，B. Frazerが挙げられ, 談話標識の詳細な分類が提示され, 体系的な研究が進められつつある。[Fraser(1990, 1996, 1999, 2007)]

以上，駆け足で言語学の流れを辿りながら，談話標識の研究状況について言及したが，一見，談話標識はマイナーな周辺的要素であると見られがちであるが，文レベルを超えた単位を対象とする言語研究の中で，脈々とその研究が継続されてきたのである。以下，一部前後する部分もあるが，可能な限り時系列的に，談話標識研究の各分析アプローチについてさらに詳しく見ていきたい。

Ⅱ．談話標識研究を巡るさまざまな分析アプローチ

本節では，テクスト文法的アプローチ，会話分析的アプローチ，コーパス文法的アプローチ，そして語用論的アプローチを順に取り上げ，談話標識についての基本的概念及びその分析方法について概観していきたい。

2.1. テクスト文法的アプローチ—Halliday & Hasan(1976)

談話標識研究の初期の段階で，談話標識をまとまった形で取り上げ，詳しく記述的研究をしたものとして Halliday & Hassan(1976) が注目される。Halliday & Hassan(1976) は，以下のように定義される結束性 (cohesion)，あるいはもう少し幅広く首尾一貫性 (coherence) を中心的な概念として，テクスト分析を進めていった。

> Cohesion occurs where the interpretation of some element in the discourse is dependent on that of another. The one presupposes the other, in the sense that it cannot be effectively decoded except by recourse to it. When this happens, a relation of cohesion is set up, and the two elements, the presupposition and the presupposed, are thereby at least potentially integrated into a text.（結束性は，談話における要素の解釈が他の要素に依存している場合に生じる。一つの要素が他の要素の前提となり，その一方の要素が他の要素に依存することなしに，効果的に解釈されないことを意味している。こうしたことが生じる際に，結束性の関係が築き上げられ，その二つの要素，すなわち前提となる要素と前提にされた要素が，少なくとも潜在的に統合されてあるテクストを形成するのである。）(Halliday & Hassan 1976 : 4)

以上のように，本稿で問題とする談話標識は，Halliday & Hassan(1976) の枠組みでは，「結束性」を担う文法的装置として位置づけられることになり，さらに詳しく言うと，結束性を担う主な文法的カテゴリーとして，照応関係 (reference)，代用 (substitution)，省略 (ellipsis)，接続関係 (conjunction)，語彙的結束性 (lexical cohesion) が挙げられているが，談話標識は，接続関係を表すカテゴリーの中で詳しく記述されることになる。

> Conjunctive elements are cohesive not in themselves but indirectly, by virtue of their specific meaning; they are not primarily devices for reaching out in the preceding (or following) text, but they express certain meanings which presuppose the presence of other components in the discourse.（接続的要素はそれ自体結束性を持っているものではなく，間接的に，その特定的な意味によって結束性を持つに至る。すなわち，それらは，本来的には，先行する，あるいは後続するテクストに広がっていく言語表現ではなく，談話の中で，他の要素の存在を前提とするある種の意味を表しているのである。）(Halliday & Hassan 1976: 226)

Halliday & Hassan(1976) では，上記の接続関係が大きく５つに下位区分されており，Additive（付加），Adversative（逆接），Causal（原因），Temporal（時間関係），Continuative（継続）という接続関係が認められ，それぞれの接続関係を合図する標識として，接続詞などと共に，談話標識が論じられている。個々の談話標識についてもその基本的な働きや特定の文脈における興味深い分析が行われているが，分析対象として使用したテクストが L. Caroll の“Alice in Wonderland”に限られ，主として書き言葉における談話標識の分析に留まっており，談話標識の一部の機能を記述したにすぎない。しかしながら，中心概念とした首尾一貫性 (coherence) は，談話分析の基本的概念となり，その後の研究に大きな影響を与えていくことになる。[2]

Conjunction	1. Additive	I read a book in the past few days *and* I like it.
	2. Adversative	They started out to England *but* got captured on the way.
	3. Causal	It was a beautiful tree *so* I left it alone .
	4. Temporal	My mother was in Ireland. *Then* she came over here.
	5. Continuative	What kind of a degree? － *Well*, in one of the professions.

表１：接続関係の分類

2.2. 会話分析的アプローチ

アメリカ合衆国やイギリスにおいて，生の資料 (authentic data, naturally occurring data) を分析対象とする談話分析あるいは会話分析の中で，談話標識が注目されることになり，談話標識に焦点を当てた研究も出てきた。本論では，その代表的なものとして，Schourup(1982/1985) と Schiffrin(1987) を取り上げ，その概要を見ていきたい。

2.2.1. Schourup(1982/1985)

Schourup(1982/1985) では，談話標識は「話し手の発話時点における思考状態を明示するもの (envincive)」と考え，以下のような３つの「世界」(world) に関わるものと考えている：話者の私的世界 (the private world of the speaker)，話し手・聞き手の共有世界 (the shared world of the speaker and hearer)，並びに他者世界 (the other world)。それぞれの「世界 (world)」については，以下のように説明されている。[3]

> The covert thinking of the speaker, what the speaker has presently in mind and may, or not disclose, will be referred to below as *the private world*; what is on display as talk and other behavior on the part of conversants and is thus available to both the speaker and some other (s) will be called *the shared world*; and the covert thinking of other conversants, which is invisible to the speaker, will be called *the other world*.（話し手の隠在的思考，すなわち，現在話し手が頭の中に持っており，開示するかもしれないし，しないかもしれないものは，以下，「私的世界」と称されるものである。会話参与者に，談話やその他の行動として明示され，それゆえに，話し手と他者の両方に入手可能なものは，「共有世界」と呼ぶ。また，他の会話参与者の隠在思考は，話し手には見えないものであり，「他者世界」と呼ばれる。）(Scourup 1982: 5)

談話標識とこの「世界」との関係については，Schourup(1982/1985) の結論部分において，以下のようにまとめられている。

> Each of the items discussed is used, generally speaking, to relate what is covert to what is overt in ongoing conversational behavior. The relationships involved here have been described in terms of three 'worlds' : the one known to the speaker alone, that known to the addressee(s) alone, and the world known to both. The disclosure problem may in individual cases involve the incongruity between what is shared and what is private, the invisibility of the other world to the speaker, the incongruity between what is presumed to be in the other world and what is in the private one, and so on.（議論されたそれぞれの項目は，一般的に言えば，継続する会話的行為の中で，隠在的なものを明示的なものに関係づけるのに使用される。ここに含まれる関係は，以下の３つの「世界」の観点から記述されるものである：すなわち，話し手のみが知る世界，聞き手のみが知る世界，その両者が知る世界。開示に関する問

題は，個々のケースにおいて，共有されるものと私的なもの，そして話し手に見えない他者の世界の物事との間における不一致，すなわち，他の世界で前提とされることと私的世界にあるもの間の不一致を含むものとなろう。）(Schourup 1982: 111)

以上のような枠組みで，*like*，*y'know* について詳しく分析され，*now*，*I mean*，*mind you*，*sort [kind]of*，*and everything*，*and stuff* や間投詞についても個別的分析が行われている。

Schourup(1982/1985) の研究は，個別の談話標識についての記述的研究として価値のあるものとなっており，それと共に，独自の言語観，あるいは「世界観」で談話全体を司る概念を一般化しようとしたところにも特徴がある。

L. Schourup は，その後も独自に談話標識研究を進め，日本で早い時期に Schourup &Waida(1986) を出版すると共に，Shcourup(1991, 2000, 2001) などにおいて，談話標識の体系的研究を進めている。

2.2.2. Schiffrin(1987)

Schourup の後に，会話分析の叡知を結集し，本格的な談話標識研究となった Schiffrin (1987) が出版された。その研究の中で，談話標識は次のように定義されている。

> I operationally define markers as sequentially dependent elements which bracket units of talk.（機能的な観点から談話標識を談話単位を関連づける連続的に依存した要素と定義する。）(Schiffrin 1987：31)

この定義の背景的な理論として，次のような首尾一貫性 (coherence) に基づく言語観がある。

> The analysis of discourse markers is part of the more general analysis of discourse coherence—how speakers and hearers jointly integrate forms, meanings, and actions to make overall sense out of what is said.（談話標識の分析は，より一般的な首尾一貫性の分析の一部である，すなわち，話し手と聞き手が協力して言語形式，意味，行為を統合し，発話された内容から全体的な意味を形成する方法についての分析の一部分である。）(Schiffrin 1987：49)

Schiffrin(1987) では，談話標識は，「談話の文脈的調整を担うもの」(contextual coordinates of talk) と規定され，以下の５つのレベルで機能すると考えている：観念構造 (Ideational Structure)，発話行為構造 (Action Structure)，発話交換構造 (Exchange Structure)，参与者枠 (Participation Framework)，情報状態 (Information State)。

第一の機能レベルは，ある言語表現は，談話的に何らかの結束性及び指示的関係を表すことになるが，基本的には観念構造 (Ideational Structure) を形成することになり，談話標識

は，その観念構造を論理的に結びつけることになる。第 2 の機能レベルとして，発話は文脈的に何らかの発話行為を表し，発話行為構造 (Action Structure) を形成していく。この機能レベルでは，談話標識と発話行為との関連を考察していくことになる　第 3 の機能レベルとして，発話が組み合わさって会話の順番連鎖 (turn sequences) を形成し，それらは発話交換構造 (Exchange Structure) を生み出す。一連の談話標識は，もっぱらそうした発話交換構造と関わり合いを持ち，その機能を発揮していくことになる。こうした談話機能の前提となる首尾一貫性には，談話の生産者及び受容者，そしてその知識体系も関与していると考えられ，Schiffrin(1987) では，話し手・聞き手の関係を参与者枠 (Participant Framework) として，談話構造の第 4 の機能レベルを設定している。最後に，参与者が持つ発話と関連した背景的なメタ知識を情報状態 (Information State) として，談話モデルに組み入れている。

以上の Schiffrin(1987) の談話モデルでは，会話分析の手法を取り，言語は常にコミュニケーションの場で用いられ，その文脈によって影響を受けるものと捉えられており，言語構造はこうしたコミュニケーションを反映したものとなっているといった考え方をしている。設定されている 5 つの機能レベルの背後には，談話の隣接単位の関係を通して構築される首尾一貫性 (coherence) の概念があり，それぞれの機能レベルは，独自のタイプの首尾一貫性を表し，個々の談話標識がその首尾一貫性にどの様に寄与しているかを記述していくことになる。

以上の分析によって明らかにされたことは，極めて基本的なことであるが，談話（会話）というものは，決してランダムに生産されるものではなく，パターンを形成すると共に，首尾一貫性を持ってコミュニケーションに貢献するということであった。そうしたコミュニケーションのプロセスの中で，談話標識が大きな役割を果たしていることが明らかにされたのである。[4]

具体的な研究としては，以下のように *oh*，*well*，*and*，*but*，及び *or*，*so* と *because*，*now* と *then*，*y'know* と *I mean* をそれぞれの機能と関連づけて分析している。以下，その分析結果を一覧で示すが，星印 (*) はその該当するレベルにおいて主たる機能を果たすことを表している。

情報状態	参与者枠	観念構造	発話行為構造	発話交換構造
*oh	oh		oh	
well	*well	well	well	well
		*and	and	
		*but	but	
or		*or		
		*so	so	
		*now		
then		*then	then	
I mean		I mean		
*y'know		y'know		

表 2：機能レベルと談話標識との関係

以上のような会話分析的な研究は，近年の IT 機器の発達と呼応し，新たに確立したコーパス言語学 (Corpus Linguistics) の中で盛んに行われ，様々な研究成果が発表されている。以下，その集大成の一つとして出版された Biber, et al.(1999) における談話標識の取扱いについても少し見ておきたい。

2.3. コーパス文法的アプローチ

Biber, et al.(1999) は，特に口語的な資料に頻度が高い談話標識に注目し，以下のような定義を与えている。

> Discourse markers are particularly characteristic of spoken dialogue. They are words and phrases which are loosely attached to the clause and facilitate ongoing interaction.（談話標識は特に口語的な談話に特徴的なものである。それらは，節にゆるやかに付随し，後続する相互作用を促進する語や句である。）(Biber, et al. 1999:140)

Biber, et all.(1999) は，特定の言語理論に立脚して一般化を図ってものではなく，もっぱら記述的な集大成として評価できるものであるが，談話標識に関しては，さらに詳しく以下のように述べている。

> Discourse markers are inserts which tend to occur at the beginning of a turn or utterance, and to combine two roles:(a)to signal a transition in the evolving progress of the conversation, and (b) to signal an interactive relationship between speaker, hearer, and message. Words and phrases which are discourse markers are often ambiguous, sharing the discourse marker function with an adverbial function. ... The items included as 'discourse markers' are open to

debate. For our purposes the category includes interactive uses of *well*, *right*, and *now*, as well as the finite verb formulate *I mean*, *you know*, and *you see*. Many other less frequent forms, such as *mind you* and *now then*, might also be regarded as discourse markers, as could some inserts primarily considered under other headings, such as *oh* in 14.3.3., and *okay* in 14.3.3.6 below.（談話標識は会話の順番や発話の初めに生じる傾向にある挿入語で，以下の２つの役割が結合されている：(a) 会話が発展していく中で移行を合図する。(b) 談話標識である語や句は話し手，聞き手，そしてメッセージの間の相互作用を合図する。談話標識として含まれる語は，しばしば談話標識的な機能と副詞的な機能を共有し，曖昧である。我々の目的に対しては，そのカテゴリーには，*I mean*，*you know*，や *you see* などのような定形動詞を持つ決り文句と同様に，*well*，*right* や *now* などの相互作用的な使用を含む。*mind you* や *now then* などのような他のあまり頻度の高くないものも，14.3.3 の *oh* や 14.3.3.6 の *okay* のように，主として他の見出しの下で考察される挿入語と同様に，また談話標識としてみなすことが可能であろう。）(Biber, et al. 1999:1086)

2.4. 語用論的アプローチ

発話行為理論や P. Grice の会話の規則に基づく語用論の議論の中で，談話標識が特に表立って議論されることはなかったが，Grice(1975/1989) の中で，以下の例における *therefore* の働きについて議論され，*therefore* は慣習的含意 (conventional implicature) を担う要素として位置づけられている。

(1) Bill is a philosopher and he is, *therefore*, brave.

Now I do not wish to allow that, in my favoured sense of “say” , one who utters [1] will have *said* that Bill’ s being courageous follows from his being a philosopher, though he may well have said that Bill is courageous and that he is a philosopher. I would wish to maintain that the semantic function of the word “therefore” is to enhance a speaker to *indicate*, though not to *say*, that a certain consequence holds.（[1] の発話者は，私が好むところの「言う」という意味では，多分ビルが勇敢であることと哲学者であることは言ったであろうが，彼が哲学者であるが故にその結果ビルが勇敢であると言ったことは認めたくない。’therefore’ という語の意味機能は，話し手がある結果が成立しているということを「言っている」のではなく，「示唆している」と主張したい。）(Grice 1989:21)

このように，語用論の中心的概念である含意 (implicature) との関連で，本稿で問題とする談話標識がすでに議論されていたことは注目に値し，後に詳しくみる関連性理論で中心課題の一つとなる事柄が Grice の研究の中で取り上げられていたのである。

一方，語用論の概説書として定評のある Levinson(1985) においても，談話標識についての記述が若干見られ，以下のように談話的ダイクシスを担う要素としての位置づけている：

To return to straightforward issues in discourse deixis, there are many words and phrases in English, and no doubt most languages, that indicate the relationship between an utterance and the prior discourse. Examples are utterance-initial usages of *but*, *therefore*, *in conclusion*, *to the contrary*, *still*, *however*, *anyway*, *well*, *besides*, *actually*, *all in all*, *so*, *after all*, and so on. It is generally conceded that such words have at least a component of meaning that resists truth-conditional treatment (Grice 1975; Wilson 1975; Levinson 1979b). What they seem to do is indicate, often in very complex ways, just how the utterance that contains them is a response to, or a continuation of, some portion of the prior discourse.（談話直示表現における直接的な問題に戻ると，英語においては，そして，間違いなくほとんどの言語において，発話と先行する談話の関係を示す語や句がある。例としては，発話の最初に来る *but*，*therefore*，*in conclusion*，*to the contrary*，*still*，*however*，*anyway*，*well*，*besides*，*actually*，*all in all*，*so*，*after all* などの用法がある。一般的に，そのような語は，少なくとも真偽条件の扱いを拒むような意味要素を持っている。(Grice, 1975; Wilson 1975; Levinson, 1979b). その働きは，しばしば非常に複雑で，それらを含む発話が，先行談話の一部分に対する反応となっていたり，継続を示すものとなっている。）(Levinson 1983:87-88)

さらに，Grice の提唱した会話的公理 (Conversational Maxims) と関連して，次のような記述が見られる。

Consider for example the English discourse particles *well*, *oh*, *ah*, *so*, *anyway*, *actually*, *still*, *after all*, and the like：these might be described as 'maxims hedges' that indicate for recipients just how the utterance so prefaced matches up to co-operative expectations.（例えば *well*，*oh*，*ah*，*so*，*anyway*，*actually*，*still*，*after all* などのような英語の談話辞を考えて見よう。これらは，聞き手にとって，そうした語句が前言として伴う発話がいかに協調的な期待に沿っているかを示す「公理の垣根語」として記述することが出来るかもしれない。）(Levinson 1983：162)

このように，従来の語用論においても，中心的な課題としては取り上げられなかったにせよ，特異な語用論的機能を持つ語彙項目として注目されていたことは指摘できる。また，これらの語句が，命題の真偽値に直接関わるものではなく，聞き手に正確な発話意図を伝達するために，発話の含意レベルで機能しているという分析は重要で，後に，関連性理論で詳しく議論される言語学的意味の精緻化において影響を与えることになる。

Ⅲ．関連性理論と談話標識

談話標識が，理論言語学の表舞台で注目されるようになったのは，関連性理論の登場のおかげであった。本節では，特に，その関連性理論の発展に寄与した D. Blakemore の一連

の研究を追いながら，現時点における関連性理論での談話標識の位置づけをまとめておきたい。

3.1. Blakemroe の一連の研究とその評価

当初，Blakemore(Brockway)(1981) は，意味論と語用論のインターフエイスに関心があり，その発話解釈に関わって，意味論と語用論を繋ぐ存在として，談話接続語 (discourse connectives) に着目した。そして一連の語句が，発話や文脈を結びつける際に，「発話の語用論的解釈に意味論的制約を加える」ものとして位置づけたのである。関連性理論の発展に伴い，従来のような意味論と語用論の区別は不要となり，言語表現はすべて関連性 (relevance) に貢献するという観点から論じられることになり，言語学的意味 (linguistic meaning) は，すべて広く認知を反映したものであり，その認知的意味をいかに位置づけるかがその中心課題となり，その議論の中で談話標識が注目されることになる。

ここで断っておかなければならないのは，関連性理論は，談話標識，あるいは談話接続語を説明するための理論ではなく，談話標識，あるいは談話接続語を詳しく精査することにより，言語学的意味がより厳密に規定されるようになったということである。また，関連性理論の中で問題にされた語句は，一般に談話標識と称されるカテゴリーに属するが，そのすべてのものが一様に共通した言語学的意味を持っているとは言えないことを明らかにしたのである。

まず，Blakemore(1987) において，談話接続語をさらに詳しく吟味することにより，「命題の真偽値に関わる要素」と，「発話解釈の算出のみに関わる要素」を区別した。「言語学的意味」の下位区分として，いわゆる，概念的意味 (conceptual meaning) と手続き的意味 (procedual meaning) の区別の重要性を指摘したのである。さらに，Blakemore(1992) において，改めて関連性理論の枠組みにおいて談話接続語の機能を整理し，談話接続語を「含意 (implicatures) に制約を課すもの」として，「関連性を生み出す文脈的効果 (contextual effects)」の観点から談話接続語を特徴付け，以下の３つに整理したのである (Blakemore 1992：136-142)：

(2) (i) 文脈的含意を生み出す談話接続語：*so*, *therefore*
(ii) 文脈的含意の強化に関わる談話接続語：*after all*, *besides*, *indeed*
(iii) 文脈的含意を否定する談話接続語：*however*, *still*, *nevertheless*, *but*

そして，それらが共通して，手順的な意味 (procedual meaning) に貢献しており，概念的意味 (conceptual meaning) との区別を強調したのである。しかし，この時点で，すでに談話接続語の秘める複雑さに気づいており，それぞれの語句についての詳細な分析が必要なことを指摘している。

Blakemore(1996) では，従来扱ってきた but や so 以外の項目として，in other words に代表される同格標識 (appositive makers) の分析に取り組み，同格標識は，so や but とは

異なって，これらは，概念的意味をもち,「高次的表意に制限を課すもの」として言語学的意味に寄与するものとして位置づけたのである。このように一般に言う談話標識の多様性に改めて気づき，その分析の難しさを指摘している。(cf. Blakemore 1996:345-346) Blakemore(2000) において，but と nevertheless の使い分けを詳しく吟味することにより，そして Blakemore(2002) では, 最も難解な well を射程に入れ, 手順的意味の再考が行われた。

従来の考え方では，手順的意味は,「含意に制約を課すもの」として規定されていたにすぎなかったが,「(狭義の先行する言語的）文脈に対する制限を含め，発話解釈に関わる推論プロセスのすべての情報を含むもの」として，その概念の拡張が図かられ，広範囲の用法を持つ well の一般化を図る過程で，談話標識は,「発話解釈を最小限の労力できるよう，文脈及び文脈効果を特定化し，文脈から生じる様々な推論の可能性についての選択を制限し，最適の関連性の達成に寄与することを合図する標識」という最も一般的な結論に至ったのである。[5] この結論の意味するところは，談話標識が，言語表現の中で，マイナーな特異な存在ではなく，他の言語表現と同様に，関連性を担い統一的に説明されるべきものとして位置づけられたことを意味している。

以上が, Blakemore の到達点であるが, Blakemore の研究成果が, 関連性理論に取り込まれ，言語学的意味は以下のように整理されている。

以下の表では，末尾に，本稿に関係する言語表現が，どのような言語学的意味を担っているのかも併せて示している。[cf. Ifantidou-Trouki(1992), Wilson & Sperber(1993), Sperber & Wilson(1986/1995)]

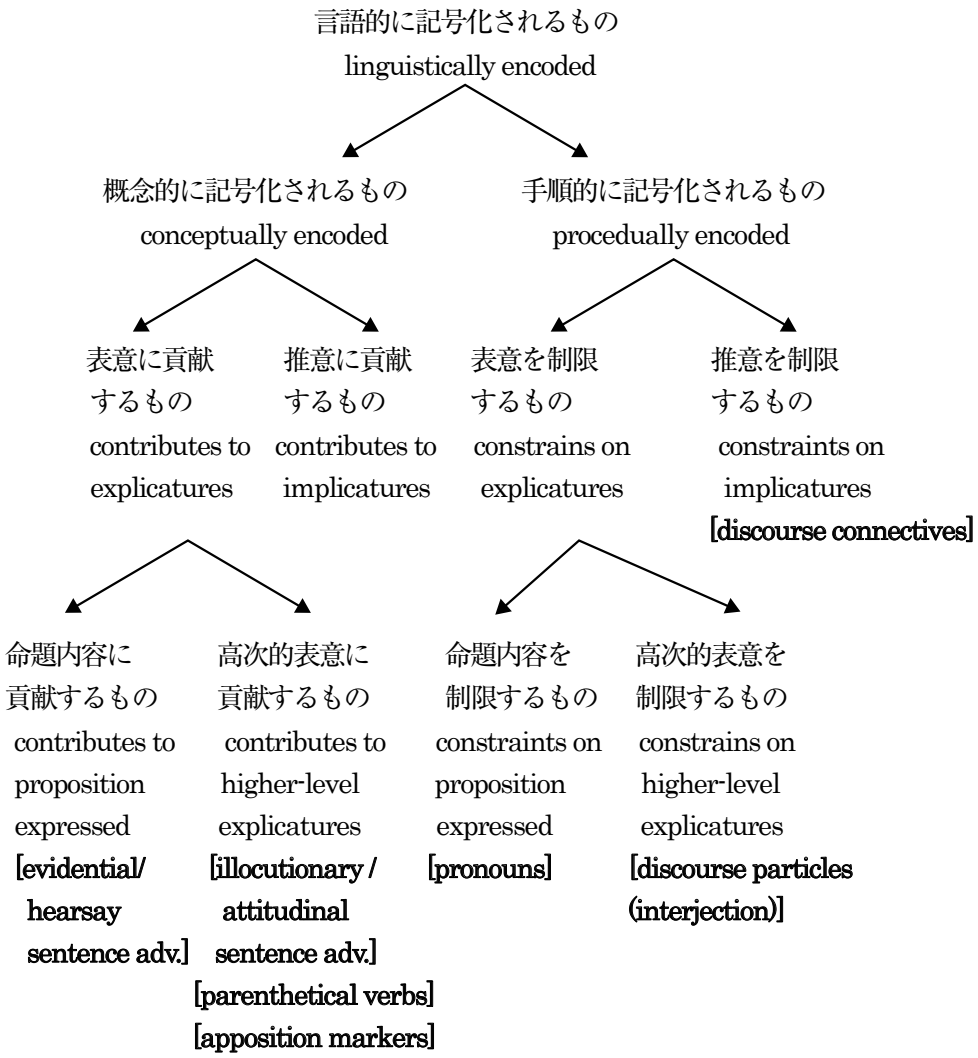

図１：言語学的意味と各言語表現との関係

Ⅳ．B. Fraser のアプローチ

談話方式研究の最後のアプローチとして，もっぱら談話標識そのものに焦点を当て研究を進めている B. Fraser の研究を取り上げておきたい。

4.1　B. Fraser の基本的枠組みについて

Fraser(1990, 1996) では，一連の語句は，独自のカテゴリーを形成するものと考え，共通して固有の語用論的意味を持つとして語用論的標識 (Pragmatic Markers）というカテゴリーを認め，その基本的な機能を以下のようにまとめている。

Pragmatic Markers (cf. Fraser 1990) correspond to the different types of potential direct

messages a sentence may convey. These pragmatic markers, taken to be separate and distinct from the propositional content of the sentence, are the linguistically encoded clues which signal the speaker's potential communicative intentions.（語用論的標識というのは，文が伝達している様々なタイプの潜在的な直接的なメッセージと対応している。これらの語用論的標識は，文の命題内容とは分離した別のものとして解釈され，話し手の潜在的な伝達意図を合図する言語学的に記号化された手がかりを与えるものである。）(Fraser 1996:168)

さらに語用論的標識は以下の３つに細分化されている (Fraser 1996:169)：

(3) (i) 基本的語用論標識 (Basic Pragmatic Markers)：基本的なメッセージの発話の力を合図するもの。
(ii) 解説的語用論標識 (Commentary Pragmatic Markers)：基本的なメッセージについてコメントするメッセージを合図する。
(iii) 並列的語用論標識 (Parallel Pragmatic Markers)：基礎的メッセージに付け加えてメッセージを合図する。

これらの語用論的標識と共に，談話標識を一つの区分として設け，以下のように定義している。

Discourse markers signal the relationship of the basic message to the foregoing discourse. In contrast to the other pragmatic markers, discourse markers do not contribute to the representative sentence meaning, but only to the procedual meaning. They provide instructions to the addressee on how the utterance to which the discourse marker is attached to be interpreted.（談話標識は，先行する談話と基本的なメッセージの関係を合図するものである。その他の語用論的標識とは違い，談話標識は表示的な文の意味には貢献せず，手順的な意味のみに貢献する。それらは，聞き手に談話標識が付されている発話がどのように解釈されるかを聞き手に教えるものである。）(Fraser 1996:169)

さらに，談話標識は以下の４つに下位区分されている。

(4) 話題転換標識 (Topic Change Markers)
a) I don't think we can go tomorrow. It's David's birthday. *Incidentally*, when is your birthday?
b) *Speaking of* Martha, where is she these days?

back to my original point, before I forget, by the way, incidentally, just to update you, on a different note, parenthetically, put another way, returning to my point, speaking of X, that

reminds me, etc.

(5) 対比標識 (Contrastive Markers)

a) A: We can go now, children. B: *But* we haven't finished our game yet.

b) John won't go to Poughkpeepsie. *Instead*, he will stay in New York.

c) Jane is here. *However*, she isn't going to stay.

all the same, anyway, but, contraiwise, conversely, despite (this / that), even so, however, in any case / event, in spite (this / that), in comparison (with this / that), in contrast (to this / that), instead (of doing this / that), nevertheless, nonetheless, (this / that point) notwithstanding, on the other hand, on the contrary, rather (than do this / that), regardless (of this / that), still, that said, though, yet, etc.

(6) 敷衍標識 (Elaborative Markers)

a) Take your raincoat with you. But *above all*, take gloves.

b) I think you should cool off a little. *In other words*, sit down and wait a little bit.

c) He did it. *What is more*, he enjoyed doing it.

above all, also, aternatively, analogously, and besides, better, by the same token, correspondingly, equally, for example/instance, further(more), in addition, in any case/even, in other words, in particular, indeed, likewise, more accurately, more importantly, more precisely, more specifically, more to the point, moreover, on the basis, on top of it all, or, otherwise, similarly, that is, to cap it all off, too, what is more, etc.

(7) 推論標識 (Inferential Markers)

a) Mary went home. *After all*, she was sick.

b) A: Marsha is away for the weekend. B: *So*, she won't be available Saturday.

accordingly, after all, all thing considered, as a consequence, as a logical conclusion, because of this/that, consequently, for this/ that reason, hence, in this / that case, it can be concluded that, it stands to reason that, of course, on this/ that condition, so then, therefore, thus, etc.

以下の例文は，やや人工的なものであるが，上記の４つの標識が一文に現れていることが興味深い。順序としては，談話標識 (However)，解説的語用論標識 (quite frankly)，並列的語用論標識 (Sir)，基本的語用論標識 (I estimate) の順で配列されていることに注意されたい。

(8) I appreciate that you are a member of the Police benevolent Association and a supporter of the baseball league. *However, quite frankly, Sir, I estimate* that you were going a bit more than 86 miles per hour. (Fraser 1996:196)

4.2 Fraser(2009) における改編について

Fraser(2009) において，これまでの分類が改編され，大きな枠組みとしては，すべてを語用論標識 (Pragmatic Markers) として統括し，上記の並列的標識 (Parallel Markers) は，解説的標識 (Commentary Markers) に吸収し，従来の基本標識 (Basic Markers)，解説的標識 (Commentary Markers)，談話標識 (Discourse Markers) の 3 区分と共に，新たに談話マネジメント標識 (Discourse Management Makers) を設定することを提唱している。談話マネジメント標識 (Discourse Management Makers) は，さらに下位区分され，談話構造標識 (Discourse Structure Markers)，話題方向付け標識 (Topic Orientation Markers)，注意喚起標識 (Attention Markers) などが提案されている。

(9) 談話マネジメント標識 (Discourse Management Markers)

(a) 談話構造標識 (Discourse Structure Markers)：*first, then, in summary, I add,* etc.

(b) 話題方向付け標識 (Topic Orientation Markers)：*anyway, back to my original point, before I forget, but, by the way, incidentally, just to update you, on a different note, parenthetically, put another way, returning to my previous point, speaking of X, that reminds me,* etc.

(c) 注意喚起標識 (Attention Markers)：*ah, alright, anyway, anyhow, hey, in any case, in any event, now, now then, oh, ok, so, so good, well, well then,* etc.

上記の下位区分を設けたことによって，少なくとも談話標識の下位区分の一つとして設けられていた話題転換標識 (Topic Change Markers) は，話題方向付け標識 (Topic Orientation Markers) に吸収されることになる。従って，現時点での Fraser の分類は，以下のように整理し直すことができる。

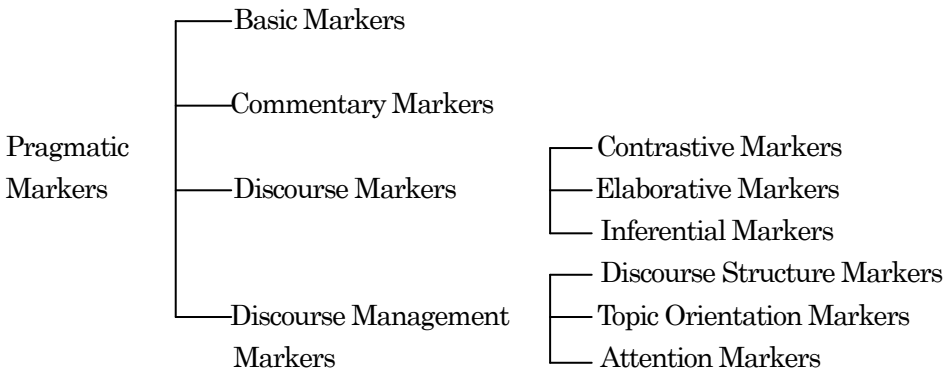

図 3：語用論標識の分類

Fraser の一連の研究は，正面から談話標識を捉え，最も包括的で詳細に論じているという点で評価できる。ただし，理論言語学の研究として見る場合には，用語上，関連性理論の Blakemore との共通点が見出され，その中心的な機能を論じる際に「手順的」(procedual) という用語を用いているが，その用語の使用については，Blakemore のような厳密さは欠け，真偽値に関与しない意味が手順的意味であると短絡的に考えている。(cf. Blakemore 1993, 1995, 1998)。Fraser の研究は，厳密な理論言語学的研究というよりは，むしろ記述的研究として評価でき，例文を提示しながら，具体的にそれぞれの談話標識の機能を丁寧に説明していく手法は，我々の伝統的な語法研究ともよく馴染むものである。Fraser のアプローチは，独自の枠組みで談話標識を分析しようとしているものの，従来の研究成果を統合しようとした折衷的な研究としての位置づけができるように思われる。

V．談話標識についての基本的考え方とその分析の観点

以上，談話標識を巡って様々な分析アプローチを取り上げてきた。以下，改めて談話標識を特徴付け, それらをどの様な観点から分析していけばよいのか, 議論を進めていきたい。

5.1　談話標識の一般的な特徴

これまでの談話標識の研究における大きな問題は，体系的な研究がなされてこなかったという点が挙げられるが，その根本的な原因は，談話標識の定義が定まらず，どのような言語表現を含めるのかコンセンサスがなかった点にある。本稿では，談話標識という一つのカテゴリーを認める際に，以下のようなプロトタイプ的な考え方をしておきたい。(cf. Jucker & Ziv 1998)

(i)　談話標識は一つの文法的カテゴリーを形成しているものとして捉えるが，そのカテゴリーは，名詞，形容詞，動詞，副詞といったいわゆる品詞的なカテゴリーと並列的なものではなく, 高次的な機能的･意味的カテゴリーとして捉えておきたい。したがって，その成員については，種々の品詞，複数の構成要素を持つ言語表現を認めることになる。副詞，前置詞句，間投詞などが主な成員となるが，節レベルの最近注目を集めているレキシカル･フレイズ (lexical phrase) と称されるものも，一部その射程に入れる。

(ii)　カテゴリーを形成する成員の意味的・機能的特徴については，ある一定の共通した特徴は認められるにせよ，すべての特徴を各成員が共有するとは限らない。ある成員は極めて「談話標識的」であるが，ある成員は，文の構成要素の一部としても機能し，談話標識としては「周辺的」であるといった段階性 (gradience)，あるいは連続性 (continuum) を持つカテゴリーとして捉える。

(iii)　談話標識の共通する中核的な特徴としては，その名称が示唆するように，「談話レベルで機能し，話し手・聞き手の何らかの発話意図を合図する独自の談話機能を備えて

いる」という点が挙げられる。但し，ここでいう「談話」(discourse) は，広義に捉え，談話標識が現れる前後の文脈，さらに，テクストとして具現化される文脈のみならず，「発話状況」(utterance situation) を含むものとして解釈する。さらに，その発話状況に参与する話し手・聞き手の知識や相互作用を行うコミュニケーションの諸要素が談話標識の機能に関与することになる。

網羅的ではないが，談話標識の一般的な特徴を改めて列挙しておきたい。

(10) ＜音韻的・語彙的特徴＞
(a) 一語からなるものが多いが，句レベル，節レベルのものが含まれる。
(b) 伝統的な単一の語類では集約できない。
(c) ポーズを伴い，独立した音調群を形成することが多い。
(d) その談話機能に応じ，様々な音調を伴う。

(11) ＜統語的特徴＞
(a) 文頭の位置に現れることが多いが，文中，文尾に生じるものもある。
(b) 命題の構成要素の外側に生じる，あるいは統語構造に緩やかに付加されて生じる。
(c) 選択的である。

(12) ＜意味的特徴＞
(a) それ自体で，文の真偽値に関わる概念的意味をほとんど，あるいはまったく持たないものが多い。
(b) 文の真偽値に関わる概念的意味を持つ場合にも，文字通りの意味を表さない場合が多い。

(13) ＜機能的特徴＞
多機能的で，いくつかの談話レベルで機能するものが多い。

(14) ＜社会的・文体的特徴＞
(a) 書き言葉というより話し言葉で用いられるものが多い。
(b) くだけた文体で用いられるものが多い。
(c) ジェンダー的な特徴があり，女性言葉により典型的に現れるものがある。

上記の特徴の中で，意味的特徴と，機能的特徴については，もう少し詳しく述べておきたい。

意味的特徴としては，談話標識は命題内容の一部として文の真偽値に関わる意味を（ほぼ）持たないと言及したが，関連性理論における議論のように，談話標識自体が何らかの「言

語学的意味」，あるいは「談話機能的意味」を持っていることは明らかであり，それをどのように捉えるのかについては，以下の３つの考え方が挙げられる (cf. Schourup 1999)

(15) (i) 同音異義語的アプローチ (homonymy approach)：例えば，ある談話標識が複数の用法で用いられる場合に，それぞれの意味機能を同音異義語的に捉える考え方。
(ii) 単一意味的アプローチ (monosemy approach)：ある談話標識に中核的な共通の意味を認め，その中核的な意味機能からすべての用法，あるいはその派生的意味を説明していく考え方。
(iii) 多義語的アプローチ (polysemy approach)：ある談話標識が複数の用法を持つ場合に，多義語的に捉える考え方。

記述的には，多義語的アプローチをとり，その意味的・機能的ネットワーク，あるいは用法的ネットワークを考えていくのが生産的であろう。但し，単一意味的アプローチ，あるいは，中核的意味アプローチ (core meaning approach) とも呼べる立場から，談話標識を眺め，その全体像を説明していくことも重要であると思われる。

また，機能的特徴については，さらに詳しく考察することが必要である。「多機能的」で，談話標識が機能するいくつかのレベルについては，大きく以下のような機能レベルが考えられる。

(16) (i) Textual Function（談話の構成と関わる機能）
(ii) Cognitive Function（情報の認知と関わる機能）
(iii) Attitudinal Function（話し手の発話態度と関わる機能）
(iv) Interactive Function（話し手・聞き手の相互作用と関わる機能）

以下，上記の４つの機能レベルを考慮しながら，談話標識を分析するにあたって，どのような観点に立つべきか，考えていきたい。

5.2 談話標識の分析の観点

すでに論じてきたように，談話標識の分析の難しさは，談話標識に多種多様なものがあり，その機能するレベルについてもいくつか考えられ，画一的な分析が困難であるという点である。以下，どのような観点から談話標識を眺めていけばよいのか，本稿では，以下 20 の観点を示しておきたい。

5.2.1 先行発話との関わりを考える

談話標識の共通項は，話し手・聞き手の認知状況を含めて，センテンスを越えて機能するということである。従って，言語学的には，まず先行発話との関係を見ていくことになろう。

観点１（意味論的）：談話標識が，先行文（先行発話）に対して，後続する内容がどのような論理的接続関係を合図しているのかを考察する。

この詳しい論理的接続関係については，すでに示した先行研究の中では，Halliday(1994) が最も詳しく，同様に，Quirk, et al.(1985) における分類や Swan(2005) の分類が参考となるであろう。[6]

観点２（語用論的）：談話標識がどのような（会話的）含意を合図するのかを考察する。

広くは, 談話標識が話し手の発話意図を明示する標識として捉え, 文字通りの解釈に加え, 発話が含意する意味内容を考察することになる。その際，その含意は，どのような会話の公理 (conversational maxims) と関わって，その遵守及び違反を合図しているのかを説明することによって，発話意図を明らかにしていくことになる。談話標識によって，その意味解釈が制限されることになる。また，こうした語用論的な考え方では，談話標識がどのような種類の発話行為 (speech acts)，あるいは発話行為条件と関わっているのかを考察することも重要となり，そうした分析的観点は，別途設定しておきたい。

観点３（語用論的）：談話標識がどのような発話行為と関係しているのか，あるいは，それぞれの発話行為のどの様な発話条件と関わっているのかを考察する。

発話行為の種類等については，これまでの語用論の成果を踏まえることになるが，命令, 要求, 依頼, 提案, 申し出等, 特に, 聞き手との相互関係を必要とする発話行為との関わりが, 主たる関心事となる。

以上の語用論的な考察をさらに一般化していく際に，関連性理論の成果を踏まえた考え方も有力である。理論言語学の援用は，それぞれの概念を正確に理解した上で慎重に行うべきであるが, 関連性理論の観点からは, 以下のように分析の観点を設定することができる。

観点４（関連性理論的）：談話標識がどのような手順的意味を合図しているか考察する。具体的には，以下の３点から，その文脈的効果を考察する。

(i) 文脈的推意を生み出す文脈的効果を合図するか？
(ii) 文脈的推意を強化する文脈的効果を合図するか？
(iii) 文脈的推意を否定する文脈的効果を合図するか？

5.2.2. 情報との関わりを考える

談話標識は，先行発話，あるいは後続発話との関係で，その情報性について合図することがある。そして, 情報の産出及び受容に関わって何らかの合図を行うことになる。従って, 情報性と関わって，以下の観点からの分析が必要である。

観点５（機能的）：談話標識が，新情報，あるいは旧情報とどのような関わりがあるのかを考察する。

観点６（機能的）：談話標識が情報の産出，あるいは情報の受容とどのような関わりがあるのかを考察する。

観点７（機能的）：談話標識が，情報の焦点化とどのように関わっているかを考察する。

5.2.3　談話・会話構造との関わりを考える

本論で，談話 (discourse) という語は，広義で使用しており，談話標識の前後の発話のみならず，幅広い文脈を含めている。そして，さらに言語表現を伴わない背景的な状況 (situation) をも射程に入れている。談話標識は，さまざまな談話構造と関わることになり，その射程 (scope) との関わりから分析の観点を設定しておきたい。また，先行研究で見たように，談話と同じ概念で会話 (conversation) を大きな単位として認め，その会話とどのように関わっているかを考察していく必要がある。本論では，その両者を統合する形で，いくつかの談話標識の分析的観点を示しておきたい。

観点７（談話・会話分析的）：談話標識がどのような単位の談話・会話単位と関わっているのかを考察する。具体的には，局所的 (local) な関わりを持つのか，全体的 (global) な関わりを持つのか，談話標識の射程 (scope) を考察する。

観点８（談話・会話分析的）：談話・会話の開始セクション (opening section)，話題セクション (topic section)，終結セクション (closing section) のうち，主にどのセクションと関わる機能を果たすのかを考察する。

観点９（談話・会話分析的）：談話・会話のやり取りの中で，談話標識が順番取り (turn-taking) とどのように関わるのかを考察する。さらに具体的には，順番依頼 (turn-requesting)，順番保持 (turn-holding[keeping])，順番譲渡 (turn-yielding)，順番放棄 (turn-relinquishing[abandoning]) とどう関わるかを考察する。

上記，観点８及び観点９の下位区分になるが，談話・会話の中で，話し手が談話・会話調整を行っている機能が見出され，談話・会話調整機能として，いくつか分析の観点を示しておきたい。

観点 10（談話・会話的）：談話標識がもっぱら聞き手の注意を喚起する機能 (attention-getter) を表しているかを考察する。

観点 11（談話･会話的）：談話標識が，談話･会話の順番を保持するため，あるいは遅らせる［時間稼ぎをする］ため，沈黙を埋める機能 (silence filler) を果たしているかを考察する。

観点 12（談話・会話分析的）：談話・会話の話題と関わって，新しい話題の導入，部分的な話題の変更［修正，詳細，具体化，拡張など］，中断した後の話題の再開等，どのような機能を果たしているのかを考察する。

観点 13（談話・会話分析的）：談話標識が，談話・会話修正とどのように関わっているかを考察をする。

観点 13 については，自己修正 (self-repair) と関わっているのか，あるいは他者修正 (other-repair) と関わっているのかを考察し，さらに，どのような方向で修正を行っているのか，すなわち，「とちり（非意図的な誤り）の修正」なのか，「より適切な語句の選択，意味［程度］を制限する修正」なのか等，詳細な記述を行うことになる。

5.2.4　発話態度との関わりを考える

後続する命題内容に対して，話し手が態度表明しながら情報伝達をしていく場合がある。こうした発話態度については，以下のような観点から分析していく必要があろう。

観点 14（発話態度的）：談話標識が，相手の発話に対して，驚きや喜び，怒り等どのような感情を抱いたことを合図するのかを考察する。
観点 15（発話態度的）：談話標識が，情報を受容し，その内容に関心を抱いているのか，あるいは無関心なのかを考察する。
観点 16（発話態度的）：談話標識が，後続発話を行うことにためらいや控え目な態度を表し，垣根語 (hedge) として機能しているかを考察する。

5.2.5.　対人関係との関わりを考える

最後に，談話標識は，ポライトネス (politeness) と関わって機能する場合があり，相手との対人関係を考慮しなければならない。

観点 17（対人関係的）：談話標識が，聞き手に対して敬意や尊敬を表しているかを考察する。
観点 18（対人関係的）：談話標識が，聞き手にとって批判的あるいは不利益を表す内容を伝達する際，聞き手に配慮していることを表すかを考察する。
観点 19（対人関係的）：聞き手の「面子」(face) を立てる機能を果たすかを考察する。
観点 20（対人関係的）：談話標識が，聞き手に対するポライトネスというより自己防衛的な機能を果たしているかを考察する。

5.2.6.　その他の語法・文法的な観点

以上は，機能レベルからの観点であったが，談話標識についてその実態を明らかにするためには，以下のような観点からの特徴付けも補足的に必要である。

① 文の種類（平叙文，疑問文，感嘆文，命令文，祈願文）とどの様な関係があるか？
② 社会言語学的差異，すなわち，文体 (formality)，男女差，年齢差，地域差等があるか？
③ 一般に談話標識は選択的であるが，使用が義務的な統語環境（文脈）はないか？　逆に，

生じると非文となるのはどのような統語環境（文脈）か？

④ 談話標識の反復を含め，他の談話標識との共起関係はどうであるのか？

⑤ 類似した意味合いを持つ談話標識がどのように使い分けられるのか？

Ⅵ．おわりに

本稿の目的は，これまで談話標識がどのように研究されてきたのかを回顧すると共に，改めて談話標識の特徴を包括的に捉え，その意義を再確認し，幅広い分析的観点を示すことであった。

談話標識に対する考え方としては，大きく２つの立場が認められ，その一つは，文を越えた談話で機能するという側面を重視し，談話標識がその首尾一貫性 (coherence) にどのように貢献するのかを中心に考えるアプローチであった。もう一つの立場は，話し手・聞き手がコミュニケーションを行う際に，話し手は，どの様な発話意図を持って発言しているのか，また，聞き手は，どのように推測しながらその発話解釈を行うのかといった側面から談話標識を特徴づける（認知）語用論的アプローチであった。

談話標識の特徴としては，その多種多様性にある。このことは特に驚くべきことではなく，談話標識がすべてのコミュニケーションの場において機能していることを考えると，当然の結果であるように思われる。むしろ，こうした多種多様性を前提とした上で，談話標識に向き合っていくことが重要であるように思われる。

談話標識の意義については，言語の基本的な機能に立ち戻り，「言語は人間が外界世界を切り取る手段である」と考えると，その世界の切り取り方が談話標識によって合図されると言える。このように，周辺的なものに見られがちな談話標識は，言語の本質的な部分とも深い関わりがあり，関連性理論の研究に見られたように，談話標識研究を通して，言語の本質にも迫っていくことができるものである。

本論で示した分析の観点は，いずれも談話標識を体系的によりレベルの高いレベルでその質的研究を進めていくためのものである。量的研究については，広く ICT 機器の進歩，並びにインターネットサービスの向上により，容易に多くの資料を収集することができるようになった。問題はその得られた資料からどのような一般化を抽出するかということであり，この作業は，時代が変わっても英語研究者の手に委ねられているのである。個々の例について，文脈を正確に読みとり，本稿で示したどのような観点を適用するかは，その「研究者の眼」にかかっている。

本稿で示した 20 の観点については，さらに整理が必要となろう。特に，従来の語用論的な考え方と新しい関連性理論の考え方については，根本的に異なるものとして捉えるべきであるが，含意 (implication) と推意 (assumption) は，言語表現の文字通り以外の意味を表していることは共通しているが，厳密には必ずしも一致しない。分析の眼が理論言語学の用語に振り回されないように注意する必要がある。理論言語学的にはこうなると説明しても必ずしも十分な説明となっていない場合もあり，記述的に分かりやすく説明していくことが望ましい。

談話標識の今後の研究の方向性としては，大きく２つの観点から考えられる。個別の談話標識に焦点を当て，その徹底的な記述を目指す研究の方向性と，一つの機能共通する機能から複数の談話標識を見渡し，それぞれが果たす役割の相違にも注意しながら，体系化を図っていく方向性である。この両者は，相補的な関係にあり，そのどちらも重要な研究となるが，特に後者の研究の発展に期待したい。まずその手始めとして，B. Fraser の示した分類に従い，それぞれの語用論的標識の詳細な研究が期待される。

注

1. 上記の談話標識研究の変遷の中で，その名称については，様々なものが用いられてきた。主だったものを挙げると以下のようなものがある [cf. Brighton(1996), 高原 (1998), Jucker(1997), Schourup(1999) など]：(i) discourse ～：discourse connective, discourse connector, discourse marker, discourse modal, discourse modality indicator, discourse operator, discourse particle, etc. (ii) pragmatic ～：pragmatic expression, pragmatic formative, pragmatic marker, pragmatic particle, etc. (iii) そ の 他：attitude marker, boundary marker, confirmation seekers, conjunctive adverb, connective, contextulization cue, editing(self-correction) marker, expressive particle, filler, frame marker, hedging device, half-conjunction, hesitation marker, hesitator, initiator, intimacy marker, interjection, particle, pop marker, prompter, repair marker, softening connective, starter, topic switchers, turn-takers, etc. この様々な名称そのものが談話標識研究の発展段階，それぞれの研究アプローチを反映している。他方，談話標識の多機能性，位置づけの不安定さを反映しているとも言える。これらのうちで，「談話辞」(pragmatic[discourse] particles) が好んで用いられた時期もあったが，現在では，談話標識 (discourse markers) が最もよく用いられ定着したように思われる。
2. こうした Halliday の研究を受けて，その中心的な概念である結束性 (cohesion)，あるいは首尾一貫性 (coherence) を基に，心理言語学的な立場からも新たな議論が展開されている。
3. Schourup(1982) では，'envincive' という語がキーワードとして用いられており，以下のように定義されている：ENVINCIVE: a linguistic item that indicates that at the moment at which it is said the speaker is engaged in, or has just then been engaged in, thinking: the envincive item indicates that this thinking is now occurring or has just now occurred but does not completely specify its content. [cf. envince: to show a feeling or quality very clearly in what you do or say. —*LD3*]
4. Redeker(1990) は Schifrrin(1987) を修正する形で，談話標識という用語を避け，談話の首尾一貫性に関わる一連の語句を次のように定義する談話操作語 (discourse operators) という用語を用いている：A discourse operator is a word or phrase—for instance, a conjunction, adverbial, comment clause, interjection—that is uttered with the primary function of bringing to the listener's attention a particular kind of linkage of the upcoming utterance with the

immediate discourse context.（談話操作語とは，例えば，副詞やコメント節，間投詞など，直接的な談話的文脈にこれから発話される発話のある特定的な結びつきを聞き手に注意喚起するといった主たる機能を持つ語，あるいは，句である。）この定義に従うと，“deictic” な意味を担う時間副詞としての *now* や *then* を含むことになり，*let me tell you a story, as I said before, since this is so* などの節レベルの言語表現は除かれることになる。Redeker(1990) では，次の３つのレベルで機能すると考えている：Ideational Structure（概念的構造），Rhetorical Structure（修辞的構造），Sequential Structure（継起的構造）Schiffrin(1987) の機能レベルと比較すると，Information Sate と Participation framework は個々の発話に関わり，他の発話と発話の関係を表す他の３つのレベルとは異なるものとしている。

5. 関連性理論においては，文脈 (context) とは，狭義の言語的文脈のみならず，発話の理解にあって，発話の内容と共に推論 (inference) の前提として用いられ，結論を導く役割をする想定 (assumption) すべてを含む概念として用いられる。また，関連性理論で推意 (assumption) は，その理論的枠組みにおける表意 (explicature) と対で理解されるべき概念で，この表意も，Grice の言う 'what is said' と必ずしも一致しておらず，結果的に，推意は，Grice に端を発する語用論で語用論の言うところでの含意 (implicature) とは一致しない。また，Grice の言う慣習的含意 (conventional implicature) と会話的含意 (conversational implicature) のような区別は存在しない。
6. Halliday(1994) では，(i) 敷衍 (Elaboration) (ii) 拡張 (Extension) (iii) 強化 (Enhancement) という３つの大きなカテゴリーを設け，それぞれをさらに詳しく細分化している。他方，Quirk et al.(1985) では，共立詞 (conjuncts) の分類として，A. Listing, B. Summative, C. Appositive, D. Resultative, E. Inferential, F. Contrastive, G. Transitional 等を挙げ，さらにそれぞれの下位区分を示している。Swan(2005) については，Discourse Markers の項目を参照されたい。

参考文献

Austi, J.L. 1962. *How to do things with words*. Oxford: Clarendon Press.

Ball,W. 1986. *Dictionary of link words in English discourse*. London: Macmillan.

Biber, D. et al. 1999. *A Longman grammar of spoken and written English*. London: Pearson Longman.

Blakemore, D. 1987. *Semantic constraints on relevance*. Oxford: Oxford University Press.

Blakemore, D. 1992. *Understanding utterances*. Oxford: Blackwell Publishers.

Blakemore, D. 1993. "The relevance of reformulation." *Language and Literature* 2(2), 101-120.

Blakemore, D. 1996. "Are apposition markers discourse markers?" *Journal of Linguistics* 32, 325-347.

Blakemore, D. 1998. "The context for so-called 'discourse markers'." In K. Malmkjaer & J.

Williams(eds.), *Context in language learning and language understanding*. Cambridge: Cambridge University Press. 44-59.

Blakemore, D. 1999. "Procedures and indicators: 'nevertheless' and 'but'." *Journal of Pragmatics* 36.3, 463-86.

Blakemore, D. 2002. *Relevance and linguistic meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.

Bloomfield, L. 1933. *Language*. New York: Holt, Rinehart and Winston.

Brinton, L. 1996. *Pragmatic markers in English: grammaticalization and discourse function*. The Hague: Mouton.

Brown, P. & S. Levinson. 1987. *Universals in language usage: politeness phenomena*. Cambridge: Cambridge University Press.

Carston, R. & S. Uchida(eds.) 1998. *Relevance theory: applications and implications*. Amsterdam: John Benjamins.

Chomsky, N. 1965. *Aspects of the theory of the syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, N. 1972. *Studies on semantics in generative grammar*. The Hague: Mouton.

Chomsky, N. 1981. *Lectures on government and binding*. Dordrecht: Foris.

Chomsky, N. 1995. *The minimalist program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Coulthard, M. 1977/1987[2]. *An introduction to discourse analysis*. London: Longman.

Edmondoson, W. 1981. *Spoken discourse: A model for analysis*. London: Longman.

Ferrara, K.W. 1997. "Form and function of the discourse marker anyway:implications for discourse analysis." *Linguistics 35*, 343-378.

Fraser, B. 1990. "An approach to discourse markers." *Journal of Pragmatics* 14, 383- 395.

Fraser, B. 1996. "Pragmatic markers," *Pragmatics* 6(2), 167-190.

Fraser, B. 1998. "Contrastive discourse markers in English." In A.H. Jucker & Y. Ziv(eds.), *Discourse markers: description and theory*. Amsterdam: John Benjamins, 301-326.

Fraser, B. 1999. "What are discourse markers?" *Journal of Pragmatics* 31, 931-952.

Fraser, B. 2009. "Topic Orientation Markers." *Journal of Pragmatics* 41, 892-898.

Goldberg, A. 1995. *Constructions: A construction approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.

廣瀬浩三. 1988.「英語の談話修正表現について」六甲英語学研究会（編）『現代の言語研究』263-274. 東京 : 金星堂.

廣瀬浩三. 1989a.「談話辞 anyway の分析」『語法研究と英語教育』11, 29-38. 東京 : 山口書店.

廣瀬浩三. 1989b. "A discourse grammar of *anyway*."『島根大学法文学部紀要文学科編』11(2), 1-20.

廣瀬浩三. 1997.「Love means never having to say "what do you mean?"―メタ言語活動の諸相(1)」『島大言語文化』4, 14-61.

廣瀬浩三. 1998.「メタ言語的観点から見た英語表現について」小西友七先生傘寿記念論文

集編集委員会）編）『現代英語の語法と文法』287-295. 東京 : 大修館書店.
廣瀬浩三. 1999.「Love Means Never Having to Say “What do you mean?” ―英語におけるメタ言語的活動の諸相 (2)―」『島大言語文化』第 7 号，1-51.
廣瀬浩三. 2000.「語法研究の立場から見た談話標識」『英語語法文法研究』第 7 号，35-50.
廣瀬浩三. 2001.「談話の展開を促す談話標識」『英語青年』（研究社）Vol. CXLVII, No.7., pp.446-447.
廣瀬浩三. 2003.「関連性理論から見た談話標識 」『島大言語文化』14 号，21-41.
Hopper, P. J. and E.C. Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambrdige: Cambridge University Press.
Hymes, D. 1974. *Foundations in sociolinguistics: An ethnographic approach*. Pennsylvania: University of Pennsylvania Press.
Ifantidou-Trouki, E. 1993. “Sentential adverbs and relevance.” *Lingua* 90, 69-90.
Jackendoff, R. 1983. *Semantics and cognition*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
Jackendoff, R. 1990. *Semantic structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
Jucker, A.H. & S.W. Smith. 1998. "*And people just you know like 'wow'*: discourse markers as negotiating strategies." In A.H. Jucker & Y. Ziv(eds.), *Discourse markers: description and theory*. Amsterdam: John Benjamins, 171-222.
Jucker, A.H. & Y. Ziv(eds.) 1998. *Discourse markers: descriptions and theory*. Amsterdam: John Benjamins.
Keller, E. 1979. "Gambits：conversational strategy signals." *Journal of Pragmatics* 3, 219-238.
小西友七. 1997.『英語への旅路』東京 : 大修館書店.
Lakoff, G. 1987. *Women, fire and dangerous things*. Chicago: University of Chicago Press.
Langacker, R.W. 1986. *Foundations of cognitive grammar Vol.I. Theoretical Prequisites*. Stanford: Stanford University Press.
Langacker, R.W. 1992. *Foundations of cognitive grammar Vol. Ⅱ Descriptive Applications*. Stanford: Stanford University Press.
Lenk, U. 1998. *Marking discourse coherence*. Gunter Narr Verlag.
Manser, M.H. 1983. *A dictionary of contemporary Idioms*. London: Pan Books.
松尾文子. 1993.「談話接続語としての so」 衣笠・赤野・内田（編）『英語基礎語彙の文法』194-202. 東京 : 英宝社.
Quirk *et al*. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
Remler, J.E. 1978. "Some repairs on the notion f repairs in the interests of relevance," *CLS* 14, 391-402.
Sapir, E. 1921. *Lanuage: An introduction to the study of speech*. New York: Harcourt, Brace and World.
Sacks, H., E. Schegloff, and G. Jefferson. 1974. "A simplest systematics for the organization of turn-taking in conversation." *Language 50*, 696-735.

Schegloff, E., G. Jeffferson, and H. Sacks. 1977. "The preference for self-correction in the organization of repair in conversation." *Language 53*, 361-382.

Schegloff, E. and H. Sacks. 1973. "Opening up closing." *Semiotica* 7, 289-327.

Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.

Schourup, L.C. 1983. *Common discourse particles in English conversation. Working Papers in Linguistics*. No.28. The Ohio State University. 1-119.

Schourup, L.C. 1999. "Discourse markers." *Lingua 107*, 227-265.

Schourup, L.C. 2000. "Homing in on discourse marker meaning."『英語語法文法研究』第 7 号, 1-17.

Schourup, L.C. 2001. "Rethinking well." *Journal of Pragmatics* 33, 1025-1060.

Schourup, L. C. & T. Waida. 1987. *English connectives*. 東京 : くろしお出版.

Searle, J. 1962. *Speech acts*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sperber, D. & D. Wilson. 1986/1995[2]. *Relevance: communication and cognition*. Oxford: Blackwell.

Stubbs, M. 1983. *Discourse analysis: the sociolinguistic analysis of the natural language*. Chicago: University of Chicago Press.

Swan, M. 1980/1995. *Practical English usage*. Oxford: Oxford University Press.

Tabor, W. & E.C. Traugott. 1998. "Structural scope expansion and grammaticalization." In A. G. Ramat & P. Hopper (eds.), *The limits of grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins, 229-271.

Takahara, P. O. 1998. "Pragmatic functions of the English discourse marker *anyway* and its corresponding contrastive Japanese discourse markers." In A.H. Jucker & Y. Ziv (eds.), *Discourse markers: description and theory*. Amsterdam: John Benjamins, 327-351.

Tanaka, H. 1997. "*In other words* and conversational implicature." *Pragmatics* 7(3), 367-387.

Van Diik, T. 1977. *Text and context : Explorations in the semantics and pragmatics of discourse*. London: Longman.

Van Diik, T. 1979. "Pragmatic connectives," *Jourmnal of Pragmatics* 3 (5), 447-457.

Wilson, D & D. Sperber. 1993. "Linguistic form and relevance." *Lingua 90*, 1-25.

吉田一彦. 1986.『現代英語の表情』 東京 : 研究社.

吉田一彦. 1997.『現代英語紀行』 東京 : 大修館書店.